

---

# みなみけと南君

ちか

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

みなみけと南君

### 【Nコード】

N5850M

### 【作者名】

ちか

### 【あらすじ】

春香たちの南家と、ある高校生の出会い。これがきっかけで南家と大きく関わることになる高校生の話。作者は春香スキーなので、春香に偏ってしまうかもしれません（焦）また、本作品は恋愛小説をイメージしていますww

## 1章 出会い（前書き）

初めての投稿になります！いたらない点もありますが、頑張る所存です！

## 1章 出会い

「朝」

4月。そう、今日から新学期。

休むわけにもいかなないので、学校に行かなくてはならない。

「うへーダルいお」

俺が声を発しても返事はない。

それもそのはず、現在、俺の両親は仕事で海外、姉は遠くの大学に通ってるからその近くに住んでいる。

「別に寂しくはないけどな。さあ、学校に行くか」

俺が出かけようとして時計を見ると冷や汗が大量にでてきた。

「遅刻ギリギリやん！」

急いで自転車で学校に向かった俺は、秘密のルートを通ることにした。

「急がないとー！やばしやばし！」

顔を下に向け、思いっきりペダルを踏む！

当然、自転車は早く進むが俺は前を見ていなかった。気付くと、目の前にロングヘアーの女子生徒が視界に現れた「どいてくれええええ！」「えっ？」

俺は出来るだけブレーキをかけながら叫んだが、その女子生徒にぶつかってしまった。

「すすすいません！大丈夫ですか？」

まずいぞ！女子を引いちまうなんて俺の紳士としての心が痛みなが

らも必死に言葉を発する。

「ええ何とか。あなたこそ大丈夫？怪我はない？」

マジか。引いた俺を攻めないで逆に心配までしてくれるなんて、まるでお母さんの様な暖かさを感じてしまったよ俺。

「はっはい！本当にすいませんでした」

「うん！今度からは気をつけてね？あつ早くしないと遅刻しちゃう！それじゃあね」

そう立ち去る彼女を見てこんな事を思ってしまった。

「これなんてギャルゲ？」

その場で突っ立ってたこの後、さっそく遅刻してしまったのは言うまでもない。

## 1章 出会い（後書き）

文才が無いのは百も承知でしたが、何とか書く事が出来ました！  
もし、よろしければ読んだ感想をお聞きたいです。更新はなるべくするつもりなので頑張ります！今回主人公の名前まだでてねえw

## 2章 保坂現る（前書き）

まだ春香が全然出てこない（焦）今回はあの気持ち悪い奴が登場しますww

過度な期待はしちゃいかんww次こそ春香出します！

## 2章 保坂現る

（教室）

「二年になつて初っ端から遅刻を決めるとはさすが南だな！」

こんな風に朝からさわやかスマイルで話しかけてくるのは、同じクラスメイトのたしか名前は……

そついや名前知らねえ（焦）去年からあだ名で呼んでたしな。

こいつはAと呼ばれていたな。うん。名前の頭文字がAらしいww  
つかA<sup>ナ</sup>って「あ」じゃねえか！名字くらい読んであげようよ皆……

暇なので、このままAと話す事にした。

「なあA<sup>ナ</sup>、俺、登校中に天使を見かけたんだ！ロングヘアーでさ！でも、何処かで見たことがあるような気がするんだ」

「ロングヘアーで天使？この高校でそれが当てはまるのは同学年の南 春香さんじゃないか？」

「南 春香？そついや聞いたことあるな。でも、もっと間近に見た気がするんだよなあ」

「いやいやお前はバレー部で見たことあるだろう？たまに速水先輩とかが連れてきてたぜ？お前女子きちん<sup>ナ</sup>と見ろって……」

そうか、あの人<sup>ナ</sup>が南 春香さんか！つか同学年じゃねえか！年上かと思つてたよ（焦）。俺としたことがバレーだけに集中しすぎてたな。

南という名字が一緒だったから気にはなつてたんだが、うかつだっ



たお。

「南！そろそろ時間だから集会行こうぜ！」

「はいはい、かつたるいな」

その後、集会で春香さん…いや、馴れ馴れしいな。ややこしいが、南さんとお呼びしよう。

の姿を見つけたときは、先生の話がまったく耳に入らないほど集中して見入っていたのは皆には秘密だ。

集会も終わり、今日は授業もないので部活に行こうとしたその時、あの人が現れてしまった。

「涼！今日こそ南　春香を我が男子バレー部の専属マネージャーに迎え入れに行くぞ！」

クラスの皆は静まってしまった。それもそのはず、皆は「涼」と言う名前に聞き覚えがないのだ。

俺のことを南以外の呼び方をする奴がいないので、必然的に俺は「南」と言う名前で固定されてしまっている。これを機会に覚えてほしいものだ。

「はい！俺専属のマネージャーにします！」

「こらこらダメじゃないか涼。後で特訓してやろう。」

「すみません。冗談です保坂先輩」

「ならいい。では、体育館で待っている！その間に南 春香を呼び出しておこう。あは！あはは！あはははははは！」

やっと去ったか。なんか妄想してにやけてたけど…

今のは、三年の保坂先輩。バレー部の部長だ！バレーも上手いし、顔もいい。ここまでは俺も尊敬してるんだが、何だか気持ち悪い。しかし、嫌いな訳ではないんだよ？複雑な心境だな。これがアツコの気持ちかなのかな。

とりあえずナツキ探して部活行くな。

## 2章 保坂現る（後書き）

すいません。春香は次の話で登場させたいと思います！今回は保坂で我慢して下さいね。文才なくてすいません。感想待ってます

### 3章 南ってあの南だったのか!! (前書き)

何とか3話目です。そろそろ主人公の紹介しないとマズイかなあ。  
あと、全然春香らしからぬ感じかもしれないので注意!

### 3章 南ってあの南だったのか!!

俺は、とある一年の教室に顔を覗かせる。

「ようナツキ!」

「あつ、南先輩。ウス」

「今日は練習来れるのか?」

「……スンマセン。飯作ないといけないんで」

「そうか…また保坂先輩が暴走してるから止めるの手伝ってもらおうと思ったんだがな」

「またツスか?正直、俺には保坂先輩を止められないツス。でも、南先輩なら止められるかもしれないツス」

「そうか?まあ、こうしてる間にも体育館がどうなっているか分からんからな。そろそろ行くわ。じゃあな」

「健闘を祈るツス」

ナツキが来れないのはキツイな。保坂先輩のストッパーが俺しかいなくなっちゃうじゃん!

そっぴや、速水先輩のストッパーも俺なのか?

鬱だあああ~~~~!!

そんなこんなで、着替えて体育館に着いた俺はその場で立ち尽くしてしまった。

そこで見たのは、見事なスパイクを決める南 春香の姿だった。

「はあああ!!」

勢いのあるボールはそのままアツコの手をはじき、こっちに飛んできた。

「えっ？」

そんな間拔けな声を出しながら俺に見えたのは、ヤバい…という表情の南 春香と速水先輩のにやけ顔。そして、保坂先輩の悔しがる姿…また脱いでるよ…。

バチンッ!!とまるでビンタされたかの様な痛みとともに、ボールが俺の顔面にヒット！意識はシャットダウンした。

気付くと俺は保健室で寝ていた。なにかが俺の顔面にぶつかった様な気が…：そうか！ボールだ！

ボールが俺の顔面に当たってそれで……

「あれ〜南っち起きた〜？このまま保坂みたいに起きなければいいのに〜あはは！冗談だって！そんな顔しないの！」

「冗談に聞こえないです（泣）つか、保坂先輩に何したんですか（笑）」

「俺にも当てるゝって気持ち悪かったからつい、見事なスパイクを決めてしまったわ（笑）」

「速水先輩乙です。でも何で速水先輩がここに？」

「あゝ用があるのは私じゃないんだゝ。んじゃ、突然ですがゲストをお呼びしまゝす！どうぞゝ！！！」

そう言うと同時に、速水先輩はダッシュで保健室を出て行った。凄くニヤニヤしてたけど、あれは何なのさ！怖っ！！

そんな速水先輩と入れ変わって、一人の女子が入ってきた。

「えと……大丈夫だった？」

南さん？ああ、南さんのスパイクが当たったんだった。記憶が曖昧3？だな。

今のは気にしないでいいよ（笑）

「この通りピンピンしてるよ！心配するほどでもないZE！」  
強気な俺

「さっき気絶してたじゃない」

痛い所を突くなあ。しかし、思った事をズバリ言っね。  
ズバリ言っわよってか？ははっ！

「そうだったね。でも、南さんってバレー上手いんだね！スパイクの時なんて見入っちゃったよ！」

「えっあ……ありがとう！」

あれ？南さん赤くなってるけど……。夕焼けだからか？

「バレー部入ればいいのに！今ならレギュラー取れるって！！マキとかも誘ってくれてるんだろ？」

「そうなんだけど……家に子供たちがいるから……」

え？南ってそんなD・A・I・T・A・Nなのか！？  
いや、そんな馬鹿な！ここは聞くしかないか！！

「みつ南って子供がいるの？」言ったくー！言ってしまったくー（焦）

「やややややくしく言っでごめんなさい！！！！いい妹が2人いるから！！」

最初からそう言ってよ。焦ったよ俺。

「そうかそうか！早とちりしちゃったな。そういや、自己紹介がまだだったね。俺は……」

「涼君でしょ？」

「えっ？」

いきなり言われたので、少し驚いてしまった。



しかも下の名前で呼ばれるのって新鮮だなあ。病みつきになりそう  
だ。

でも、何だろう。懐かしい感じがする。

「南 涼。高校2年でバレー部所属。勉強は中の上、バレーは保坂  
先輩に次ぐエース。でしょ？」

「南さんがなんで俺の事を??????」

「マキが毎回話してるから…あいつは保坂先輩の弟子だ…って」

アイツソンナコトヲオモツテタノカ。

ちよつと怒りがこみ上げてきましたよ私。

今度アイツが保坂先輩の彼女候補という情報を流してやる（笑）

「てゆうかまだ気付かないの？」

「何が??」

「私を見て何も思い出せない？例えば、中学1年の時とか」

「うん。中学中学??」

南さんは、俺に何を思い出せと??中学1年といえば、それなりに  
楽しかった気が。

バレーやって、遊んで、そういや、やけに仲のいい女子がいたな。  
たしか名前は…南。

南？南って名字か？名前か？どっちだっけな〜。

「そっか〜覚えてないか〜。そうだよな。中学2年の時転校とかあったしね。」

今、何と言った？？転校？何故、俺が中2の時に転校したの知ってるんだ？

同じ中学か？南？仲のいい女子？

ま・さ・か…な。

でも、聞かなきゃ分からないし…よしッ！！

「もしかして中学の時に一緒のクラスだった南か？」

自信は無かったが、彼女の何となく寂しそうな顔を見たら聞かずにはいられなかった。

「ご名答！涼君久しぶり！」

パツと笑顔がはじける。

「ええっ！まったく気付かなかったよ！まさか、同じ学校に一年もいて気付かないとはね。申し訳ナッシング」

「私も気付いたのは今日なの！自転車でぶつかったじゃない？あの後、なんか顔に見覚えがあるなあって。で、さっき体育館で気絶した涼君を見て確信したわ！なんで今まで気付かなかったのかしら？マキから聞いてたはずなのに」

「俺、中学の時は南としか呼んでなかったから下の名前を忘れてたよ。つか、今までバレーやりに来てたんだろ？練習に夢中で南がい

たのもわからなかったわ。すまん！」

ここだけの話、南の見た目がグツと大人っぽくなっていて、さらに気付きにくかったというのは、南には内緒だ。

「お互い凄く近いのにすれ違ってたみたいね。でも、これから、また話せるね！」

あれ？何か凄く恥ずかしいぞ！中学の時はなんともなかったのに…  
おかしいなあ俺。

「そっそうだな！てか、こんな時間だし、部活は…今日はいいや。  
帰るか！」

時刻は17:00時。丁度夕焼けだし、それに…南と帰りたいしな。  
べつ別に変な意味ではないぞ！？久しぶりだからいろいろ話したい  
だけだ！！

「俺高校に入ってからまた、中学の時住んでた場所に戻ったんだ！  
便利がいいしな。だが、両親とかいないから飯がめんどいな。ああ  
変な意味じゃないぞ？仕事で海外にいるんだ。そーいや、南って中  
学の時自炊してるって言ってたよな？今でもか？」

「まあね…涼君は自炊してるの？」

「断食！ときどきカップラーメンかな！！」

俺は自信満々に言っちゃった。金が少ない俺は、昼飯だけ断食  
をして食費を浮かしているのさ！朝は適当、夜はカップラーメンの  
サイクルなのでそろそろ飽きが出てきた今日この頃。

詳しく俺の食生活について報告？したところ、南が震えてる。どうしたんだろ。寒いのかな？

などに見当違いの事を考えている俺は、この後起こる出来事をまったく予想できなかった。

「いいかげんにしなさい！いい！！！」

「すすすすすいませ〜ん！」

とりあえず謝るが、効果は無いようだ。

「私そうゆづの凄くイライラするの！食生活は生活の基本よ！！！」

「はははははい！！！！！」

恐ろしい。南さんのマジギレを初めて見てしまった！悪魔みたいに恐い。

返事しかできねえや。でも、今日の朝と同様、お母さんみたいだなあ。

「涼君聞してる！？！」

「もちろんでありますよ！！南殿！！！」

「ならいいわ！だから……………そんな食生活を直すために…今日私の家で……」

「家で……？」

地獄の特訓か！？そんなのは御免だ！！今の南はマジ恐い。逃げる準備をしよう。

心の中でクラウチング・スタートの構えをとる俺は、それほど恐怖を感じていた。

「私の家で…」

「家で…?」  
「ごくり…」

「ご飯…食べていかな…い?」

完全にうつむきながら言う彼女。わずかに見える頬は、やはり赤く見える。

マジか。

俺は馬鹿だな。地獄の特訓とか考えていた自分が恥ずかしいな。

久しぶりに会ったばかりの俺の心配とは嬉しいぜ!おい!

だから俺は

「こんな俺でいいなら、是非食べさせてくれよ!」

「じゃあ…いこっか!」

そう言うてはにかんだ南さんは本当に美人だと思った。

って待て!!若い女の子の家でご飯っていいのか!??

それに、南には妹がいたような……

えええい!!男は度胸だ!!

待ってるよみなみけ!!

### 3章 南ってあの南だったのか!!（後書き）

なんか凄く書きました。中学の時の涼と春香は、異常に仲が良かったという設定で書いてます！思いつきでポンポン書いたので、いたらない点ばかりとは思いますが、暖かく見守ってほしいです。感想まっけます!!

#### 4章 みなみけ三姉妹（前書き）

遅くなりました！！やっと4話です！またまた長くなりましたが、読んでもらえたらありがたいです。あと、南家のビルの描写はしてません！

## 4章 みなみけ三姉妹

着いちゃったよ……

目の前には「南」の表札。  
もう引き返せない状況になっていた。

「どうぞ上がって！」

南に誘われるがままに、部屋に入る俺。

部屋は綺麗に片付いており、彼女の几帳面差が分かる。

やっぱり女の子の部屋だなあと実感する。

いや、部屋というか家か。

南の両親は仕事の都合上一緒に住んでないのは中学の時に聞いていたけど、よくこんなにまとまな生活ができるな。俺も部屋掃除から始めてみるか！

「すぐ作るから待っててね！……」

南はそう言っと、キッチンに入って行った。

そんな貴重なエプロン姿の南を、俺は見逃さない！！

エプロン姿いいなあ。あいつ何着ても似合いそうだし……むっふっふ  
(企)

でも、何か忘れているような気が？………

！！！！！そうだ！南の妹だ！



妹がいるのは知っていたが、この状況を見られるのは気まずい！  
ああ、来る前に決意したはずなのに……  
しかし、家に妹はいない……のか？ 気配がないぞ？

まさか部屋で静かにしているのか？ それか気を利かせているのか？  
そう信じるしかないか……。

それにしても眠い。何か知らんが眠い。でも南のご飯が出来るまで  
我慢が……まん。

だが、俺の思いもむなしく、座ったまま寝オチしていた。

「ただいま……！ ご飯はまだか……！」

「……おまえはうるさいんだバカ野郎」

ん……たしかにうるさいなあ……何だよ……

「春香……牛乳がなかったから買ってき……うおおお……！」

「どうしたバカ野郎？……誰だこいつは？」

随分な言い様じゃないか。南らしからぬ言葉使いだし。

「寝てるな……よく見ると中々の顔してるし！ 春香……！ 男連れ込んだのか……？」

ガッシャー……ン……！！！！！！

キッチンで大きな音が。だから、うるさいってばもう。

「春香姉さまがそんな事をする訳ないだろう。こいつはただの不審者だ」

「なるほど！じゃあ、この夏奈様が懲らしめてやろう！！まずは落書きからだな」

そう言いながらマジックを近づけてくる奴。

顔面まであと数c mの所で俺は目を見開いた！！

うん。アホだったんです俺。まさか、あんなことになるとは。

[illegible]

「ぎゃ ああああああああああああああああああああ  
あああ！！！！」

ツインテールのうっさい奴のマジックが俺の目に……

やばい！！目が真っ黒になりそうだ。

そこにやつと救世主が

「二人ともうるさくさくさくいい！！！！！！」

叱られました…グスン…泣きそうだ。目が痛いからな。ガチで。

うづくまる俺。

「二人ともなにやってるのよ!？」

「不審者がいたから撃退しよう」と

「バカ野郎がここにも…」

「悪いが、俺は不審者じゃないよ！南の同級生の南 涼だ！」

うずくまりながら自己紹介する俺は、さぞかし気持ち悪いことだろう。

マキが見たら「気持ち悪い」と一刀両断されるな。

これが、俺とみなみけ次女と三女とのファーストコンタクトとなっていた。

（食卓）

「さっきはごめんごめん！！不審者かと思っちゃってさ！私は南家次女の夏奈様だ！よろしくな涼！」

「様っておいおい……ん？涼…？」

「自己紹介してたら？、名字が一緒だから涼って呼ぶから覚悟しろ！！」

そう言ってファイティング・ポーズをとる夏奈。訳わからんが面白い奴だな（笑）

「ああ！なるほどね！よろしく夏奈ちゃん」

やはり、名前で呼ばれるとドキドキすんな！まだまだ慣れそうにないぜ。

「じーーーーーーー」

「ところでさ…あっちで僕を見つめてるのは？」

「あの子は三女の千秋よ。ほら！こっちのお兄さんに挨拶！」  
南がそう言つと千秋…ちゃんはこちらに歩いてくる。

「南 千秋です。…バカ野郎」

この子には、俺はバカ野郎に見えているのか？こうなつたら…

「バカで何が悪い！！バカと天才は紙一重なんだぜ！？」

「お前はバカだけだな」

「うわあああああああああああ！断言されたあああ  
ああ！」

「涼君もバカなことしてないで…千秋も謝りなさい？」

「ごめんなさい」

素直に頭を下げる千秋。

南の言うことには従順なのな。お兄さん少し悲しい。グスン…

「ところでさ…涼はなんで家にきた訳？」

夏奈の質問は当然だな。なので、俺はこれまでの経緯を話した。

「へええなるほどねえ。春香も大胆になつたもんだよ」

ニヤニヤしながら南を見る夏奈。ニヤニヤしすぎだ！変顔になっているぜ。

「べつ別にご飯だけじゃない！そういうのじゃないわよ！」  
あきらかに動揺してないか？どうしたんだろ？

「普通は連れてこないだろ？くくくつ涼！春香を頼むぞ！」

あきらかに楽しんでるぞコイツ？まさか俺を何かと勘違いしてんな。よしっ！

「夏奈ちゃんそれは違うな！俺はただの学生で、南家には飯をたかりに来たのだよ！！！」

ジョジョ立ちという、奇妙なポーズをとりながら言い切った！

「キモっ」

「ええ」

「バカ野郎」

凄じ反応だ！しかし、ひどすぎる！ウケ狙いなのにまったくウケない。ジョジョ見ろよ。

と思いつつも、どうやら話題はそれみたいだから結果オーライか。

こうして楽しく過ごしている内に、食事は終わっていた。

「いや〜いろいろとごめんな南」

「ううん。いいのよ。妹達も涼君気に入ってるみたいだから」

「それにしても個性のある妹さん達だったね」

「そうかな？私も男の子を家に上げるのは初めてだったから、妹達が驚かないか心配だったわ」

「最後らへんはオカズを奪い合ってたけどな」

「あの子達のあんなに楽しそうな顔は久しぶりに見たわね。ところで、もう帰るの？」

「そっぴやそんな時間か。さすがに迷惑だろうから退散しますかね。」

「そうだな、そろそろか……」

「春香姉さま！」

俺の言葉を遮って、千秋ちゃんがリビングにやってきた。話を聞くと、算数で分からない問題があるらしい。

「困ったわねえ、私も分からないわ。ごめんね」

南も舌を巻く問題らしい。ここは俺の出番か！

「俺で良ければ教えるよ？」

「良かったじゃない！千秋教えてもらいなさい！」

南は皿洗いをしに、キッチンへ行ってしまった。

「……………」

「……………」

気まずい…。千秋ちゃんも南以外に聞くのは中々ないのか、少し警戒されてる気がする。

ここは腕の見せ所だな！

「問題を見せてもらん？」

千秋ちゃんは諦めたのか、渋々問題集を差し出す。

うおっ！確かに難しい！小学生の問題なのか？ってよく見たら〇〇大付属の過去問じゃないか！

これは千秋ちゃんも悩む訳だ。

だが、甘い！

「いいかい？千秋ちゃん。これはね……………」

俺は丁寧に教えていく。その甲斐あって、次の問題は自力で解けた。

「お〜」

シンプルな反応の千秋ちゃん。しかし、俺も問題解けて良かったなあ。—安心だ。

「リョーはバカ野郎だが、頭はいいんだな。夏奈とは大違いだ」

「そうか？ははっ、今なら俺をお兄ちゃんと呼んでいいぜ！」

「……………」

完全にしらけた。ヤバイ！調子に乗ってしまった。高感度ガタ落ちかこの野郎。

「……………にいい」

「えっ？」

「リョー兄」

ぐはあああああ！コイツぁ半端ない！俺おかしくなりそう。  
妹さんって素敵だねははっ

「いや、やつぱリョーでいい。俺が耐えられん」

ロリだと思われちゃうからな！俺が言い出したのに無責任だよ俺。

「リョー。じつとしてろ」

「ん？」

すると、千秋ちゃんは俺の股の間にちょこんと座った。頭が俺の胸に丁度当たるくらいなので、寄りかかってきた。

「ここは千秋ちゃんの特等席だな。ここで勉強するのかい？」

「兄と呼ばないから我慢しろ……バカ野郎」

「はいはい」

この後、勉強は1時間ほど続いた。

「思わず漫画を読みふけてしまったよ〜牛乳〜」

ツカツカ入ってくる夏奈。

「しー！！」

「春香〜どうしたんだ？」



「あれを見て！」

春香が指を指した方を見ると、テーブルで勉強していたのか、千秋が涼の股の間に入ってよっかかるようにして寝ている。涼も座ったまま寝ている。さつきも寝てなかったわけ？

「な〜んか兄弟みたいだな」

「そう？私は父娘に見えるけどなあ。名字が一緒だと親近感沸くわね」

「それは春香が母さんなのか？大胆だねえ」  
再びニヤニヤする夏奈。

「あ〜〜そうじゃないって！！もう〜」

（今日の春香はからかい甲斐があって面白い！くくく）

「んん！」

「おっ」

「ああ寝てたか。すまん。そろそろ時間だし帰るか」

「リョー……」

「ごめんな、起こしちゃったか。そろそろ帰るね千秋ちゃん」

「……………また、来い」

そう言つと同時に、再び爆睡。

「あらあら千秋ったら。ふふつ、涼君と千秋の寝てる姿が父娘みたいだったわよ」

「おいおい、俺はまだ17だよ。そしたら母さんは南だな！」

「なっ」

真っ赤になる南。そうしたんだ？何か悪いこと言ったか？……あそーゆうことか。ヤベっ、俺も恥ずかしいぞ。

二人して目を合わせられない。すげえ気まずいよ……

「お二人さんよ、外でイチャついてきなさいよ！」

「イチャついてない!!」

「違うからあ!!」

声のタイミングもぴったり合ってしまう。今は変なことは喋らない方がよさそうだ。

「じゃあ帰るな。南、飯ありがとう！美味かったよ！」

「ありがとう！また来週学校でね！」

「まゝた来いよ……春香の婿にな！」

「へへへ変なこと言わないの!!」

「あ痛ああ!!」

夏奈ちゃんには、これからもからかわれそうだな。俺のピュアハートが……

ふああ。しかし、まだ眠いなあ。早く帰って寝るか。

……また誘ってくれるといいな。

#### 4章 みなみけ三姉妹（後書き）

思いつきで書きなぐってます！なので、変な感じに思えるかもしれませんが。最後は千秋を結構書いてみました！次は夏奈かな？感想お待ちしています！！！！

## 5章 アツコとお出かけ その1（前書き）

実は僕、アツコもお気に入りだったりします！！書きたかったんです。キャラ崩壊の可能性があるので注意！アツコの株が上昇する事を願います！

## 5章 アツコとお出かけ その1

ピピピピピピピピピピピッ！！

まったく今日は休日だというのに、目覚ましのせいで早く起きちゃったじゃん。

なんてこつたい（泣）忘れてたよ！

昨日は南の家でいろいろあったからなあ。

今日はのんびりと過ごしますかね。

く30分経過く

「あああああああああ！！暇だあああああああああああああああああああ！！」

暇を持て余していた。

これは町に繰り出すしかなくね？古本屋で立ち読みでもしますかね。

「とゆゝ事でいざ臨也！！さっそく行くか！！」

一人ではしゃいでて恥ずかしく思ったが、気にしない方針で行こう。基本独り言が好きだかね！

く町く

さあて町に着いた訳だが……時刻はまだ9時、古本屋は10時開店だ。

そついや朝飯がまだだったな。朝マックでもするか！！

注文したエッグマフィンを持って席へ。いざ、試食！！

……エッグマフィン美味し！なんかこの感じ好きよ俺。

飯も食べたし、マツクから出ることにした

すると、目の前で女の子が上半身裸の男に絡まれていた。

「さあさあ！南 春香の居場所を吐くのだ！！今日こそ南 春香の家に侵入し、アハハ！アハハ！アハハハハ！」

「保坂先輩……………全開ですよ」

「俺の南 春香に対する気持ちは常に全開なのだ！！すべては愛のタ〜メリック！！ハラハラハラペ〜ニヨ！！」

「保坂先輩……………本当に全開ですよ……」

完全にアツコと保坂先輩じゃん！つか保坂先輩の事を通行人が見まくってるじゃないの！！

これはアツコも目立つちゃうな。仕方ない。助けてやるか。

「あはようございます！！保坂先輩！」

「ん？涼じゃないか。どうしたんだ？一緒に歌うか？」

「歌いませんよ！それより、話をチラッと聞いたんですけど、南の家はここですよ」

俺は親切にも速水先輩の家の地図を書いた。なんで知ってるかは秘

密だ！！

「さすが涼だ！感謝する！今度パスタの作り方を教えてやろう」

「遠慮しとくッス！自分ご飯派なんで」

「そうか…それでは今度、特製保坂弁当の試食をさせてやろう！アハハハハ！！」

そう言い残し、保坂先輩は走り去った。ってか何でカレーの歌を歌ってたんだろ？まいつか。

「大丈夫だったかアツコ？」

「うつつん。なんとか…ね。ありがとう涼君」

「まさか女子の前でしかも、通行人が見てる中で脱ぐなんて危ない人だなあ。前から思ってたけど、ありや逮捕される日も遠くないな」

「私も驚いちゃって、服の事しか指摘できなかったの」

「確かにアツコは恥ずかしがり屋だからなあ。俺が来なかったらとんだ羞恥プレイだな！」

「今日はマキがいないから、辛かったよ」

少し頬が赤くなっている。相当恥ずかしかったんだな。俺は無意識の内にアツコの頭を撫でていた。

「んっ」

「ああ悪い！つい手が…な」



「うっん、全然悪くないよ？ちょっと恥ずかしいけど…」

「ならいいんだが、つか今日は何か用があるのか？」

「今日はスポーツショップで、バレエのシューズを買いにきたの。前のがボロボロで使えなくなっちゃったから」

「アツコは練習頑張ってたもんな！速水先輩も期待してたZ E！」  
アツコがいつも朝早くから練習に来てるのを俺は知っていた。  
たまに男バレの用具の準備とかもしてくうれた事もあったしなあ。  
男バレ代表として何かした方がいいのかな？

「へ〜で、どんなシューズにするんだ？」

「それはまだ決めてないの。今日たまたまスポーツ用品が半額だから行こうと思って」

なんだって！？聞いてないぞい！！俺も練習着とか買ったかったんだよ〜

「なら俺も一緒に行っていていいか？買いたい物もあるし！それでシューズマニアのこの俺がアツコにピッタリなのを選んでやんよー！」

「えっ……………うん。行く」

「おうー！」

## 5章 アツコとお出かけ その1（後書き）

駄作ですいません。本当は一話でまとめようと思ったのですが、いかんせん現在深夜？四時なんで眠いです。中途半端でごめんなさい。できるだけ早く更新するつもりですお！んで感想お待ちしています。

## 6章 アツコとお出かけ その2（前書き）

久しぶりの投稿となります！何だか変な感じになっているかもしれません！

アツコもキャラ崩壊かもww至らない点多いですが、見守っていただけると嬉しいです。感想も凄くほしいので、暇だったら書いてもらえるとうれいです！

ではどうぞ〜〜！！！！！！

## 6章 アツコとお出かけ その2

「……………」

なんだか今日のアツコは口数が少ないな。なので俺から話題を振ることにした。

「今日はマキと一緒にしないのか？」

「えっうん。マキは春香の家に遊びに行ってるの。」

「ほお……で、アツコは買い物を選んだ訳か！ついにマキとの縁も切れたんだね」

「大袈裟だよ。私も買い物が終わってから春香の家に行くよ？」

「なるほど！今度は俺を一人にさせるのか。アツコは悪女だな」

「なっ……………何でやん」

そんなこんなで最近ツツコミをしてくれるアツコと話している内に、スポーツショップに到着した。

店内は広々としており、いろいろなスポーツのコーナーに分かれている。

もちろん俺たちはバレーのコーナーへ向かう。

「シューズだけ買うのか？」

「うん。練習着とかは使えるからね。節約しないと」

「ふ〜ん…アツコはケチでもあつたんだな！」

「私の金銭感覚がおかしいのかなあ？」

こっこいつ真剣に考えてやがる！そこはさっき言った「何でやねん」で返すところだが！

そんな天然っぷりだからマキに言いくるめられちまうんだな。納得。

「どっとうか…したの？」

ブツブツ言ってたら怪しいと思われたようだ。何かイワンコフ！）  
言わないと）

「さあ！シューズを見ようジャマイカ（じゃないか）！！」

「涼君って保坂先輩と似て……………」

「似てない！俺は否定するぜ！あの姫さんみたいに否定するぜ！」

「何言ってるのかわからないよお…………どうやってッッめば…………」

「すまん。ボケ過ぎたわお前の反応が面白くてついつい」

「もう……早く靴見よ？」

「アイアイサー！」

そろそろアツコもシューズを見たいようだな。俺もウェアとか見ようかな。ってかアツコにお勧めのシューズを選ばなくてはい

10分後

目の前には『一撃必殺』とプリントされたＴシャツ。

なんだこれはっ！一撃で黙らせる程のスパイクが打てそうな気がするぞ！

これ買ったや、おうかな、どうしよっかな。あつ！あのウェアも格好いいなあ！

これ着たら俺も女子にモテモテになって南が嫉妬し……

「涼君？なんか悩んでる姿が保坂先輩に似て……」

「それだけは認めねええええええええええええ！  
ビクッ！」

どうやら、急な大声にアツコは驚いてしまった様子。

女子にしては身長のあるアツコが怯えているのにはグツときてしまった！

だってそうだろ？こんな状況で萌えない男はいないだろよ！むしろ萌えなきゃ失礼に値するだろ！

「ああすまん。保坂先輩の生き写しと言われたから、黙ってられなかったわ」

「そこまでは言って…ないよ」

「わかってるさ。今のもボケだからな」 キメ顔で言い放つ（何をキメるかはご想像にお任せします）

「もう…」

どうやらアツコは俺のボケの頻度に呆れてるみたいだ……これから  
は自重するか。

つてか目を合わせてくれないのは何故？アツコに嫌われたら俺はも  
う生きていけないな。

そうだ！シューズ選び忘れてたのか。よしっ

「すまん！今からシューズ選………」

「選んだよ」

はい？

「選んじやったのかい？」

「うん。涼君がウェアで悩んでるからお邪魔かなあと思って」

ついに見せ場も失ったか…俺が来た意味ないじゃん。何してんだ俺  
…アツコへの恩が返せないじゃないのさ。

「本当にごめんな。シューズ選びを手伝おうと思ったんだが」

「いいの。涼君はいるだけで面白いから。でも……涼君はどんなシューズを選んでくれるのか気になるなあ」

「よしっ！実はこれなんか似合うんじゃないかと思うんだ。このメーカーはやつぱ……」

その後も「俺のお勧めスポーツ用品」の話は続き、アツコは「へー」「ほー」と相槌を打ってくれたので話がしやすかった。こんな気配りがやつぱ大事だよな？

話も終わり、帰る雰囲気醸し出すとアツコが

「…ちょっと待っててね」

「おう」

そのままバレー用品売り場から出て行った。多分トイレであろう。

そのあたりは詮索しないのが当たり前だからな。紳士として当然の当然だ。

「アツコもないことだし、なんかサプライズで買うか。そのくらいしないと南だったら怒りそうだしな」

って何で南が出てくるんだ！別に南のことなんか…ことなんか…ああそうだ。思い出した。

昔、南に何故か叩き込まれた『男だったらこれくらいはしなさい！』という教えがあったな。

何でも、親戚のおじさんがモテないらしく、協力しているうちにこの教えに行き着いたらしい。

ただの、女性側の視点じゃないか？と俺が思ってるのは内緒だ。



そっぴや練習着がないって言ってたな！やはりアツコには、このブカブカの練習着だろう！

これで非力アピールも出来るぞwwぐふふ……

あつ！？でもそうするとアツコがモテモテになってしまっんじゃないか！？

奴は悪女だから男達は騙されてしまっぞ！畜生、どうすれば……

「涼君」

「どうすればいいんだ」

「涼君」

「うん。そこでパーフェクトな訳だ」

「えいつ」

突然、バチンッ！という音

「痛~~~~い!!」

どうやらアツコにビンタされたみたいだ！許せん！この俺にビンタするなん……

「私の声、聞こえてた？」

「あつああ、聞こえてたぜ！アツコの非力アピールの伝授についてだっけ？」

「やっぱり。南君は妄想から現実に帰ってくるのが遅いね」

まあ否定はしないけどね。アツコには迷惑をかけてしまったみたいだ。

「じゃあシューズも買った所で、今日は帰……」

「やっぱり、保坂先輩に似てる」

「にににに似てねえよ」ぎこちない笑顔の俺。  
妄想のし過ぎは良くないな。気をつけよう！

「アツコ！今日から俺は」

「私は帰るけど、南君はどうするの？」

俺の宣言スルーかよww

さすがマイペースなアツコ！悪女だ。（意味不明）

「じゃあ俺もそろそろ帰るわ！アツコはこれから南の家に行くんだっけ？」

「うん。マキも待ってるから」

「そうか。じゃあ途中まで道は同じだからお供させて下さいよ!」

「了承」

「帰り道」

「涼君の家は春香の家の近くなの?」

意外にもアツコから話題を振ってきた。帰り道もアツコとの会話を楽しむでしょう!

「歩いて15分くらいかな」

「結構、近いんだね。中学は一緒だったの?」

「同じだよ。南とは中学のときから話したりしてたんだけど、俺が転校したからそれ以来だったな」

「だった?」

「高校は、またこっちに戻ってきたのさ!まさか南が同じ高校だったとはな。サプライズ!!」

「春香から中学の話は聞いてたけど、まさかあの男の子が涼君だったんだ」

「なんだねそれは？」

「うん。春香が中学の時に唯一、仲がよかった男子が居たみたいなの」

「ほうほう」

「その男子が転校しちゃって寂しかったって話を聞いたの」

へえー俺も寂しかったけど、南も寂しかったのか。  
そんだけ南の中で俺は面白い印象を与える事が出来てたってのは光栄だ。

「まあ俺は南と同じ高校に通ってる事実を最近知ったんだけどな」

「春香はバレー部に遊びにきてたけど、涼君は練習に夢中でそんなに見てなかったもんね」

「まさかな？とは思ってたんだけど」

「春香は少し気になってたみたい」

「それは申し訳ない話だ。話しかけてくれればいいのに」

「そうゆつのは涼君からしなきゃ駄目だよ」

珍しくアツコから強気で言われてしまった。

「なっなぜに？（？―？）」

「とにかく涼君から言わなきゃ駄目だったの！今後、気をつけてね」

なんだか饒舌なアツコ。

本当に今日はどうしたのだろうか？俺が南にそれ程悪い事をしてしまったのか？

うん！そうだな！俺が悪いんやな！おそらく……

「ああ…気をつけるよ」

「これで春香も……」

「何か言ったか？」

「うっん。何でもないの！お気になさらず」

そんな感じで分かれ道に着いた

「じゃあ俺はこっちだからジャーニー」

「うん。私は春香の家に行くから…またね」

＼side 涼＼

「ってか俺買い物に何の役にも立ってなかったなあ。サプライズも買えなかったし」

本当にアツコには申し訳ないです。きっと今日の事を南に話すのだから。

来週が怖いよお怖いよおorz

俺は肩を震わせながら帰った。途中で近所の子供達が「あいつ震えてね？震えてね？」と言って凝視してきたので恥ずかしくなって走って帰った。

＼side アツコ＼

「ジャーニー…ジャーニー…」

私は涼君の別れ際の台詞が気になっていた。彼は言葉の後にちよつとしたギャグをのような事を言う。

「ギャグかは分からないが、今日のジャーニーという言葉には「じゃあね」と「ハッ○ポツチステーションのあのキャラ」が掛かっていると思う。

だから何なんだろう。……そうだ！ツツコミだ！

最近、私はツツコミを練習している。理由はおもにマキのボケ対策。涼君は私のツツコミを待ってたのかもしれない。

今度から気をつけよう………ハッ○ポツチかよ！……

そんなツツコミの練習をしていた私をみた近所の子供達が「あの人見えない何かが見えてんの？怖くね？怖くね？」と言って凝視してきたので、恥ずかしくなつて早歩きで春香の家に向かいました。

穴があつたら入りたい……とはこの事だと身を持って実感した瞬間でした。

## 6章 アツコとお出かけ その2（後書き）

アツコのフラグはたちませんでしたww

アツコは何者なんでしょうか…僕の書いているアツコは何かが違う

ww

そろそろ夏奈とかメインにしたいね！でも保坂とか藤岡君も出番を増やそうと考えています！感想お待ちしてます！！



## 7章 藤岡は見た！！（前書き）

皆さんお久しぶりです。更新が止まっていたので執筆を止めたのか？という意見を頂きましたが、この話を楽しみに待っていて下さる方がいる限り、私は執筆をやめませんよ キリッ

話が雑かもしれませんが、そのうちに修正をしようと思います。今すぐにでも皆様に読んでもらいたいので投稿します！

## 7章 藤岡は見た！！

俺は後悔していた。自分が生まれた事…ではない。

現在の時刻は午前11時50分。昼飯時である。

何故、俺は自宅にいるのか……さっきまで暇潰しに町に繰り出していたというのに

まさかアツコと一緒にスポーツショップに行つて、そのまま帰つてきてしまつたなんて！！

ご飯にでも誘えばよかったわ。あつても南の家に行くんだっけな？

せめてゲーセンくらい寄れば良かったわ。

まあ後悔しても仕方ない！！昼飯を作ろう！！とびつきり美味しい昼飯をな！！

く南家く

「やっと春香の家に着いた」

ここまでの道のりは甘くなかった。特に途中で会つた子供達から凝視されたのは恥ずかしかった。

ただでさえ人見知りな私にとっては、『凝視』される程恥ずかしいことは無いのです。

先ほどの出来事を思い出しながら春香の家にお邪魔すると、既にマキはお昼ご飯を食べていた。

春香の手作りなんだろうなあ。

「もうっアツコ遅いよっ！先に食べちゃってるからね！」

「予想通り……」

「丁度いい時間帯じゃない？ほらアツコも座った座った」

「うっうん」

私はマキの隣に座ることにした。もう4月だけど、まだコタツが置いてあるのには安心した。

この時期は若干寒い日もあるので、私としてはコタツの中で丸くなるのが何よりの幸せだから。

以前、春香の家のコタツで丸くなっていると、マキから「その身長でコタツを使った非力アピールですと？悪女だ！」

と、言いがかりを付けられたので最近はやっていない。マキがトイレにでも行っている隙に丸くなるっ。

「アツコごめんね！今ご飯運ぶから」

そう言つて春香は手作りオムライスを持ってきてくれたので、美味しく頂きました。

〈1時間後〉

「アツコ食べ終わるの遅いつてゝ！まさかそれも非力アピール…」

「違つよ…そんなに一気に食べられないだけで」

「マキもいいかげんに絡みすぎでしょ！マキが早食いなだけよ」

「お腹が減つてたからしょうがない！！」

「まあマキは置いといて、アツコは何か買い物してきたの？」

「スルーされた！？てゆうかアツコは何してたの？」

「えっそんな一気に聞かれると…」

とりあえず、スポーツショップで買い物したことを報告した。

「涼と一緒に買い物してたの！？」

「涼君と買い物！？」

二人の話題への食いつきが半端じゃありません。

春香よりもマキの方が食いつくのは何故でしょう？まだお腹が減つてるのかな…

なんちゃって…ね。

「たまたま出会ったら涼君が付き添ってくれたの」

「へええ。ついにアツコも異性に目覚め…」

「なっ何でやねん！」

このような話題になると若干マキの扱いが面倒なので額にツッコミを入れて黙らせてみました。

最近の私は暴力的なのかもしれない。自重しなきゃ。

「へえー涼君何してたの？」

「なんか放浪してたよ。暇潰しって言うってたなあ」

「相変わらずの暇人スキル全開ね。昔も今も変わらず…か」

「そういえばお昼時に帰ってきてちゃったけど、ご飯どつしたんだろ  
う」

「涼君のことだからきつと……………」

く涼の自宅く

「出来た〜！」

目の前にはインスタントラーメン。世間的にはこれは料理と言わな  
いらしいが…

つゝか昨日も作ったし、毎日一食間隔が安定だな。だから、俺の体  
は恐らく大変なことになっているんじゃないかなろうか。まあ面倒だし、  
一応茹でたキャベツも献立にしているから平気：だよな？

これは栄養が偏ってヤバいことになっちゃうな。逝ってしまう前に  
皆さんに、今更ですが現状の報告です。

俺は南 涼みなみ りょうと言います。今をときめく一人暮らしの高校二年生でござる。口調は安定しません（笑）多分、厨二病です。バレー部に所属しています。勉強は頑張っている方かな。昔、仲の良かった女子に再会したので、これから面白い学生生活を送れるのではないかと期待しています 今ここ

「ダメだ。最近独り言多すぎる！一人暮らしって寂しいからだよ絶対」

ラーメンとキャベツを食べながら物々と喋る俺は周りから見れば可笑しいけど、現在は家族もいないし好奇の目線に晒されることもないのだ！

「さて、これからどうしたものか」

暇つぶしから帰ってきてしまったし、飯も済ませた。

もう寝るしかないじゃないか！！すぐさまベッドに倒れ込む俺。

「んーおやふみーzzzz」

結局暇を持て余した俺であった。

〈南家〉

「……………つてなってるわよ」

「涼君なら有り得るかも」

案の定、マキとアツコの予想は当たっていた。涼は実に分かりやすい男なのです。

それから数時間談笑を続け、時刻は夕方であった。

「じゃあ、そろそろ帰るね」

「お邪魔しました」

夕方になって二人が帰った後、春香は気づいた。

「夏奈と千秋はいつまで買い物にいつているのかしら？」

それは遡ること約5時間程前。夏奈と千秋がお昼ご飯を早めに食べ終わったときのこと。

「そういえば今日は春香のご飯当番だったよな？今日のオカズはなんなんだ？」

「ああそうだったわ！買い物にいかなきゃ…でも今日はマキとアツコがお昼を食べに来るんだった…」

お昼を待たせるのも悪いし、かといってスーパーのお昼セールは逃せない。どうするべきか。

ここで気を利かせたのは千秋であつた。

春香姉様が困っている…お助けしなくては。

「私が変わりに買い物に行ってきます」

「えっ！？でも悪いし…」

「うるさい夏奈も連れて行きます。春香姉様はゆっくりして下さい」

「私は家で寝ている！買い物は千秋だけでいい！」

断固として買い物に行かないつもり夏奈に対し、千秋は魔法の言葉を言うのであつた。

「お菓子を一つ買ってあげるからついて来いバカ野郎」

「おおーならいくぞ！行ってくるぞ春香」

単純な夏奈はこれで問題ない。

そう言つと、お菓子目当てに夏奈は家の外にでていった。

「荷物持ち担当にしようあのバカは…」



続いて千秋も行ってきましたと家をあとにした。

「少し不安ね。でも千秋がついてるから大丈夫…夫かな」  
何はともあれ、これでマキ達の予定は守れる。今度の当番は私が変わってあげなきゃ。

夕方

「今日は散々な目にあつたもんだよ」

「夏奈がお菓子に気を取られているから卵が買えなかったんだ。」

今日の献立はオムライスであつたが、何故かこのスーパーでも卵が売り切れていて、違うスーパーで見つけた最後の一つも夏奈がお菓子コーナーに直行したせいで入手できなかった。

何故今日に限って卵が売り切れなのか。みんな卵を使う日なのか今日は？

なんとも不思議な日であると感じた千秋であつた。

「まさか隣町までいくなんてねー」

春香の為、千秋達は隣町まで卵を探しに行っていた。徒歩で探していたことや、夏奈に振り回されたこともあり、普通の買い物に比べて断然長くなってしまった。

「早く帰って春香姉様に卵を届けるんだ」

流石に買い物に時間をかけ過ぎてしまった。これでは春香姉様が心配してしまう。

千秋がすぐさま帰ろうとした瞬間

「よう！お前ら」

ある若い男の姿がそこにはあった。

この時、地元の中学校のジャージを着て、部活の道具を持って帰宅中の少年…藤岡は目撃してしまった。

「南と千秋ちゃんが俺意外の男と楽しそうに会話している…だと？」

実は南家とちよつとした知り合いである藤岡だが、それ故に不思議であつた。あまり南家のことを知っている訳ではないが、南姉妹と親しい交流のある男など、たしか親戚のオジサンだけしか見たことがない。

なので、藤岡はてっきり自分とオジサン意外には異性と交流がないと推測していた。

特に南とあんなに楽しそうに…

「あの男…一体何者なんだ」

なんともモヤモヤした気持ちの藤岡であつた。

## 7章 藤岡は見た！！（後書き）

アツコとのデート？も終わり、ついに藤岡君が登場しました！

それにやつと主人公の紹介できたorz

何度も言いますが、思いつきで書きなぐってます。文で疑問に思っ点はどしどしお知らせください！！

感想お待ちしてますよー！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5850m/>

---

みなみけと南君

2011年11月17日17時48分発行